お城を救った牛と蛭

烏山城はその昔、源氏と平家の戦いの折、屋島の海で扇の的を射落とした那須の与一の一族がつくったといわれている。

これは、そんな時代のお話です。

今から四百年以上前の永禄年間のころ烏山城は、東は常陸の佐竹勢、西は宇都宮勢、北からは大田原・那須・伊王野勢に囲まれ、戦いが続いていたそうな。

なかでも、常陸の佐竹勢は、何とかして烏山城を攻めおとそうと、忍びの者を使ったりして、攻め口をさがしていたと。

ところが、敵が城の入口近くまでくると、きまって城下で飼っている牛が、いっせいに鳴きだして敵が攻めて来たことを知らせてしまうもんだから、いつも失敗していたと。そこで敵はな、ある夜、闇にまぎれて、牛を片っぱしから殺してしまったと。

牛の血は、くる日もくる日も川をまっ赤にして流れたので、この川を血水川と呼んだ

というこった。

牛を殺してしまった佐竹勢は、那珂川を渡り一気に攻めこんできたと。

するとな、なにやらヌルヌルしたものが、足の方から入りこんで手や首に吸いついたと。そこでむしるように取ってみると、何とそれは、血をいっぱいに吸った「ヒル」だったと。さすがの佐竹勢も悲鳴をあげてよ、城を攻めるどころか一目散に逃げ帰ったと。

この「ヒル」はな、殺された牛の血を吸うために、那珂川をのぼってきたと。

むかし、血水川とよばれた川は、今では、下流がきれいに埋め立てられ、「清水川せせらぎ公園」となってな、市民の憩いの場になっている。

ふんだけどよ、「ヒル」は、今でも敵が攻めてくるのを、川のどっかでじっと待っていっかもしんねえな。

おしまい

からすやまの民話第一集より